

||||||||||||||||  
特 集  
||||||||||||||||

## 災害医療—序文

獨協医科大学 循環器内科

石光 俊彦

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、獨協医科大学病院ならびに獨協医学会や同窓会の会員の身近にも多大な影響を及ぼした。各位とも当座は自身と家族の生活を確保することと担当する医療業務を整えることに尽力しながらも、次々と生じる新しい事態に対応する苦勞を余儀なくされたことと思われる。その中では予期していなかった問題に直面したことも多々あり、福島の子力発電所の事故は、その最たるものであろう。そして、不慮の災害に対する準備が決して十分でなく、いろいろな面でその重要性が実感されたことと思われる。しかし、くしくも編者は1995年の阪神淡路大震災も身近に経験する状況にあったが、当時と比べると東日本大震災における対応は、ある程度改善しているように感じられた。阪神淡路大震災においては、地震後倒壊した家屋に大規模な火災が発生したが、消防隊や救助隊の活動が十分に機能せず、多くの人の命が失われる結果となった。TVに映った当時の首相の、「人命を第一に、慎重かつ迅速な対応を望みます」という発言が空回りしているように思われたことを記憶している。編者が勤務していた医療施設も地震で被害を受けながらも、救助医療に参加することが検討されたが、会議では、「医薬品は持ち出せない」、「有給休暇の範囲で参加する」など話が進まず、末には「この会議をやること自体意味があるのか」など、不毛の議論となり散会してしまった。

災害に際し必要とされる医療の内容は、必ずしも外傷だけを中心とするものではなく、循環器、呼吸器、消化器や精神神経系のサポート、看護ケアなど広汎にわたり、

東日本大震災においては原発事故により放射線医学的な対応が必要とされたことが特徴であった。今後の不測の災害に備え、東日本大震災で各位が経験されたことを教訓として残し伝えることが、被害から立ち直りつつある私共が行うべき課題であり、この点を踏まえ、2011年11月30日の獨協医学会特別講演会では、東日本大震災における経験をテーマとしたシンポジウムが行われた。しかし、当然のことながら限られた時間では甚大な震災の経験を十分に整理してまとめることはかなわず、今回の獨協医学会雑誌の特集のテーマとして集成をはかることとなった。

また、わが国における災害は、地震だけに限らず、台風、テロ、火山活動など様々な形の被害を及ぼし、必要とされる準備や対応も一様ではない。このように、予期せず多様な形で起こる災害に対処するには、常時万端の準備を整えることは難しいかもしれないが、地域レベルで様々な事態に柔軟に対応できる連携体制を維持することが望ましいと思われる。救急車や救急患者の搬入が多くドクターヘリを有する獨協医科大学病院は高次機能病院として地域医療の中核を担う医療施設であり、災害に際しても連携の中心となり機能すべきことが期待される。そして、獨協医学会の会員の方々には獨協医科大学病院および関連する施設の災害に対する連携体制の担い手となることが期待される。そのような意味で、東日本大震災の貴重な経験を本号で災害医療の特集において形として残すことにより、今後の災害対策の参考に資することを期待する。